

教職課程履修学生のいじめ問題経験と現在のいじめ状況認識

森住 宜司¹⁾

Bully/Victim Problems and the Students of a Teaching Profession Course: Their Experiences during School Days and the Present View on Bullying

Takashi Morizumi¹⁾

要約：

本論文は、教職課程履修学生に対して、小学校・中学校・高等学校時代に経験したいじめ認知、加害・被害経験、現在のいじめの発生状況認識・今後の推移評価、いじめ報道に対する関心、情報への対応について1997年に調査したものの報告である。その結果、児童生徒を対象とした1996年実施の全国的社会学調査と比べて、学級内でのいじめ認知を多くの学生が報告し、いじめ加害も多くの学生が経験していた。他方、いじめ被害の経験率は1996年の児童生徒調査より少なかった。いじめ発生の現状を70%弱の学生が多いと認識し、今後の推移も40%弱の学生が増えると評価していた。報道への関心や情報への対応では、いじめ被害経験のある学生の方が図書類を読むことが多く、加害経験のある学生の方が友人たちと話し合うことが相対的に多い傾向がみられた。

キーワード：いじめ、教職課程、現状認知、加害・被害経験、推移評価

1. はじめに

いじめ問題がマスコミで取り上げられることは最近少なくなっているが、連続して児童虐待事件が報道され、引きこもりが社会的に特集される。いじめ問題の背景に児童虐待があり、いじめが引きこもりのきっかけや原因であるという指摘もある。1980年代半ば、あるいは1990年代半ばのいじめ自殺を契機とした報道があり社会的問題と認識され、1990年代半ばには、単に日本社会に特異な問題ではないとされ、ノルウェーの国家的対応などが紹介され、その後、各国のいじめ状況を比較する社会学的研究もなされた。このようにいじめ問題の理解や他の問題との関連などの知見は積み上げられてきているが、教職を志向する学生が教職課程科目の学習で、どの程度いじめ問題の理解を深めることができるのか、また問題を考え続けることができるのか、1つの教育課題である。

教育現実にふれることは最終学年の教育実習4週間しかなく、生徒や教師の声を直接に聞くことも少ないとすると、マスコミ報道が大きな影響を与えられ、それは学生の問題にとどまらない。1980年代半ばに社会問題化したとき「いじめ減少傾向」の報道が対応を10年遅らせ、1990年代半ばに再びいじめ自殺の報道に接するという現実である。このようにいじめ問題は、その発生の根深さと背景にある子どもの状況を考えねばならないとすると、教職課程履修学生の学習課題として続けなければならない問題である。本論文では、その教育課題を明確にするために教職課程履修学生がどのようにいじめ問題を認識・理解しているか検討する。

2. 教職課程履修学生の「いじめ」問題認識

2.1 目的

本調査は、教職課程履修学生が「いじめ」状況

1) 浦和大学総合福祉学部

Faculty of Comprehensive Welfare, Urawa University

をどう認知し理解しているかを検討するもので、ここでは「いじめ」を「精神的にまたは心身共に一方的に相手を痛めつけるような行動」^[1]として調査した。

2.2 方 法

国立 T 大学で教職課程科目「教育相談」を受講する1995年度入学で主として第3学年在籍の男女学生に対して調査を実施した。調査日時は主なものは1997年8月下旬で、一部は1996年で第2学年在籍の学生および1998年で第4学年在籍の学生であった。調査人数は159人（女子学生52人、男子学生107人）で、その専攻は中学校の教員免許教科でいえば、約60%が体育に、約16%が理科・数学、約10%が美術、約14%がその他の社会・国語・英語に該当する。調査項目は以下のとおりである^[2]。

- Q1「小・中・高時代に、学級内で『いじめ』があったか」
- Q2「いじめがあった場合、その手段は？」
- Q3「学級担任は解決のためにそれを取り上げたか」
- Q4「担任は、どんな方法で対処し、解決したか」
- Q5「『いじめ』発生の現状について」
- Q6「今後の『いじめ』推移について」
- Q7「『いじめ』問題報道への関心」
- Q8「『いじめ』問題の報道・情報の受け止め方」
- Q9「いじめに対する教師の対応の正誤」

2.3 結 果

Q1「小・中・高校時代の学級内での『いじめ』の認知」

女子学生52人、男子学生107人の学級内『いじめ』認知の割合等を記したのが Table 1 である。合わせて『日本のいじめ』見聞経験^[3]等として1997年1月実施の全国的社会学調査^[3]の結果を記してある（以下、『日本のいじめ』調査として記す）。それは小学校5年生から中学校3年生におよぶ6906人の1996年2学期の経験を回答してもらったもので、各学年約1400人の生徒のいじめ認知率というデータであるという。

本調査の対象学生である1995年度入学者の多くは、『日本のいじめ』調査との対応でいうと、小学5年＝1987年度、中学1年＝1989年度であり、1996年2学期は大学2年に相当する。これをふまえて結

果をみると、Table 1-1にあるように、過去をふりかえる本調査結果では学級内でのいじめ認知が高く、中学1年46%、中学2年40%、中学3年31%で、『日本のいじめ』調査の倍以上の認知率である。男女差では、中学3年女子の場合に25%と男子に比べて若干少ない傾向が認められる。なお、小学校については本調査では学年を指定していないので6年間と考えた場合、トータルでいじめを認知したということで64%という数字なのであり、各学年の1学期間のいじめ認知を問うた『日本のいじめ』調査での20%弱との差が大きく出ていると考えられ、同じことが中学校の場合にもいえる。しかし、教職課程履修学生であるがゆえに、学級内でのいじめ認知を覚えていたこと、あるいはいじめを認知することが多かったという可能性もある。

次に Table 1-2および Table 1-3であるが、これはいじめ被害経験と加害経験の割合を記したものであるが、まず、いじめ被害経験は全体的に、『日本のいじめ』調査より低い数字となっている。中学生でいえば、9～14%に対して本教職課程履修学生は4～6%のいじめ被害経験というもので半分程度の結果である。ただし、女子学生の小学校時代の被害経験率が男子学生の9%に比べて27%と高い数字であるが（ $\chi^2=8.4362$, $p=0.0036$ ）、これは、『日本のいじめ』調査の小学5年の数字と比べると若干高い程度で、男女計と『日本のいじめ』調査を比べるとほぼ同じ程度である。また、加害経験率も小学校の男女計は、『日本のいじめ』調査より若干高い数字であるが、その中学生の加害経験は11～19%に対して本調査の学生は6～9%の加害経験率でこれも半分程度の結果である。教職課程履修学生はいじめ被害経験も加害経験も平均より少なかった可能性がある。

Table 1-4および Table 1-5は、『日本のいじめ』調査においていじめ被害経験率および加害経験を男女別および合計で算出していたので、それに合わせて本調査結果については小学校および中学校、そして小学校から中学校に渡るそれぞれの経験率を算出したものである。いじめ被害経験率という点でも、被害経験の結果と同様、男子学生はあまり変わらないが、女子学生は被害経験率が倍以上であり、加害経験率は男女ともに倍以上という数字が確認された。

Table 1-6および Table 1-7は、いじめ経験を被害のみの場合、被害加害の場合と加害のみの場合についてまとめたものである。男女計を『日本のいじめ』調査と比べると、Table 1-6にある小学校段階では、加害のみ群が12%に対して20%と高く、これは22%という男子学生の多さによるものと思われる。この加害のみ群の男女の比率は有意な差が認められた ($\chi^2=5.3482$, $p=0.0207$)。一方、統計的な差は認められなかったが、被害のみ群も被害加害群も女子学生の方がその割合は男子に比べて多い傾向がある。しかし Table 1-7にあるように、中学校段階ではこうした男女の差や本調査結果と『日本のいじめ』調査との違いは認められなかった。なお、小学校から中学校に渡る経験として被害加害経験をまとめたのが Table 1-8であるが、そこでは被害のみ群 ($\chi^2=4.1659$, $p=0.0412$) および被害加害群 ($\chi^2=4.2564$, $p=0.0391$) で男女間に有意な差が認められた。

Q2「いじめがあった場合の手段」

Table 2は、いじめの手段について、学校段階ごとに複数回答で問うた教職課程履修学生全159人の結果をまとめたものである。それぞれの表にある手段の分類は以下のとおりである。「無視」＝仲間はずれにした、無視した。「言葉」＝悪口や言葉による。「暴力」＝殴る、蹴るなど暴力による。「いたずら」＝犯人不明のいたずら・いやがらせ。「その他」＝それ以外のもの。

小学校では「無視」「言葉」によるいじめが50%と多く、女子学生は男子学生に比べて「無視」「言葉」を多く上げているが、逆に男子学生の方が多いのが「暴力」12%である。ただし、統計的には「無視」における男女差だけが有意であった ($\chi^2=6.0277$, $p=0.0141$)。また、中学生では「言葉」41%、「無視」35%が多く、男子学生の暴力が女子学生に比べて有意に多く ($\chi^2=2.8650$, $p=0.0905$)、小学校の12%と比べても18%と多い。小学校女子の「仲間はずれにしたり無視したりすることを中心とし「悪口や言葉による」いじめが目立ち、中学校でもそれを引き継ぐ形であるのに対して、男子も同様の傾向を示しながらも、女子との違いということでは「暴力」、とくに中学校での多さが特徴である。「いたずら」が「いやがらせの様相を帯びたもの」とすると20%前後という数字

Table 1 学級内でのいじめ認知、被害・加害経験等

1-1 いじめ学級内認知（女子学生52人、男子学生107人）

	小学校	中学1年	中学2年	中学3年	高 校	
女子学生	69.2	44.2	38.5	25.0	9.6	%
男子学生	61.7	46.7	40.2	33.6	8.4	%
男女計	64.2	45.9	39.6	30.8	8.8	%

『日本のいじめ』見聞経験

小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	
17.4	21.3	19.0	18.5	12.4	%

1-2 いじめ被害経験（女子学生52人、男子学生107人）

	小学校	中学1年	中学2年	中学3年	高 校	
女子学生	26.9	7.7	5.8	3.8	0.0	%
男子学生	9.3	5.6	4.7	3.7	0.0	%
男女計	15.1	6.3	5.0	3.8	0.0	%

『日本のいじめ』被害経験

小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	
20.4	16.4	14.2	12.9	9.0	%

1-3 いじめ加害経験（女子学生52人、男子学生107人）

	小学校	中学1年	中学2年	中学3年	高 校	
女子学生	30.8	9.6	5.8	3.8	0.0	%
男子学生	27.1	9.3	7.5	7.5	0.9	%
男女計	28.3	9.4	6.9	6.3	0.6	%

『日本のいじめ』加害経験

小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	
19.3	24.9	18.7	16.4	11.1	%

1-4 いじめ被害経験率（女子学生52人、男子学生107人）

	小学校	中学校	合 計	
女子学生	26.9	9.6	36.5	% (52人)
男子学生	9.3	7.5	15.0	% (107人)
男女計	15.1	8.2	22.0	% (159人)

『日本のいじめ』被害経験率

女 子		15.8	%
男 子		13.1	%
男女合計		13.9	%

1-5 いじめ加害経験率（女子学生52人、男子学生107人）

	小学校	中学校	合 計	
女子学生	30.8	7.7	38.5	% (52人)
男子学生	27.1	12.1	31.8	% (107人)
男女計	28.3	10.7	34.0	% (159人)

『日本のいじめ』加害経験率

女 子		17.5	%
男 子		18.4	%
男女合計		17.5	%

1-6 いじめ被害加害群（小学校）

	被害のみ	被害加害	加害のみ	
女子学生	11.5	15.4	15.4	% (52人)
男子学生	4.7	4.7	22.4	% (107人)
男女計	6.9	8.2	20.1	% (159人)

『日本のいじめ』被害経験率

男女合計	8.1	9.7	12.1	%
------	-----	-----	------	---

1-7 いじめ被害加害群（中学校）

	被害のみ	被害加害	加害のみ	
女子学生	7.7	1.9	5.8	% (52人)
男子学生	3.7	3.7	8.4	% (107人)
男女計	5.0	3.1	7.5	% (159人)

『日本のいじめ』被害経験率

男女合計	7.2	4.3	10.9	%
------	-----	-----	------	---

1-8 いじめ被害加害群（小学校～中学校）

	被害のみ	被害加害	加害のみ	
女子学生	15.4	21.2	17.3	% (52人)
男子学生	5.6	9.3	22.4	% (107人)
男女計	8.8	13.2	20.8	% (159人)

Table 2 学校段階別にみたいじめの手段

2-1 いじめの手段・小学校(女子学生52人、男子学生107人)

	無 視	言 葉	暴 力	いたずら	その他	
女子学生	69.2	55.8	7.7	19.2	1.9	%
男子学生	48.6	50.5	12.1	21.5	0.0	%
男女計	55.3	52.2	10.7	20.8	0.6	%

2-2 いじめの手段・中学校(女子学生52人、男子学生107人)

	無 視	言 葉	暴 力	いたずら	その他	
女子学生	36.5	42.3	7.7	23.1	1.9	%
男子学生	33.6	40.2	17.8	16.8	0.0	%
男女計	34.5	40.9	14.5	18.9	0.6	%

2-3 いじめの手段・高校(女子学生52人、男子学生107人)

	無 視	言 葉	暴 力	いたずら	その他	
女子学生	3.8	7.7	3.8	1.9	0.0	%
男子学生	4.7	4.7	0.0	0.0	0.9	%
男女計	4.4	5.7	1.3	0.6	0.6	%

Table 3 学校段階別にみた学級担任の対応

学級内 認知あり	担任は問題を取り上げたことがあるか				
	たいてい	～もある	な い	忘れた	
小学校	35.3	38.2	14.7	11.8	% (102人)
中学校	14.9	41.5	19.1	24.5	% (94人)
高 校	7.1	7.1	57.1	28.6	% (14人)

Table 4 「いじめ」発生の現状に対する認識

	多 い	少ない	分らない	
女子学生	71.2	1.9	26.9	% (52人)
男子学生	64.5	0.9	34.6	% (107人)
男女計	66.7	1.3	32.1	% (159人)

Table 5 今後の「いじめ」状況推移についての評価

	増える	変化なし	減 る	分らない	
女子学生	40.4	40.4	5.8	13.5	% (52人)
男子学生	35.5	31.8	10.3	22.4	% (107人)
男女計	37.1	34.6	8.8	19.5	% (159人)

Table 6 いじめ報道への関心度

	極力得る	たまには	向かない	
女子学生	19.2	76.9	3.8	% (52人)
男子学生	16.8	78.5	4.7	% (107人)
男女計	17.6	78.0	4.4	% (159人)

Table 7 報道・情報への対応(女子学生52人、男子学生107人)

	そのまま	極力保存	図書読む	話し合う	調べた	
女子学生	61.5	1.9	3.8	30.8	9.6	%
男子学生	75.7	0.0	3.7	19.6	1.9	%
男女計	71.1	0.6	3.8	23.3	4.4	%

Table 8 「いじめへの対応」正答率(女子学生51人、男子学生99人)

	問題1	問題2	問題3	問題4	問題5	
女子学生	88.2	98.0	100.0	90.2	98.0	%
男子学生	88.9	100.0	99.0	89.9	100.0	%
男女計	88.7	99.3	99.3	90.0	99.3	%

(女子学生の80.4%、男子学生の79.8%が全問正解)

も見逃せない。ここで『日本のいじめ』調査の「いじめられた手口」結果をみると、それはいじめ被害経験をもつ児童生徒の回答であるが、頻度大(週1回以上)＋頻度小(月1～2回以下)経験者による「いじめられた手口」は、「無視・仲間はずれ(小学生60.0%、中学生54.2%)」「悪口・からかい(88.3%、85.3%)」「たたく・ける・おどす(39.8%、33.3%)」「悪いうわさ・持ち物に落書き(31.8%、34.6%)」「金品をとられる・こわされる(16.7%、17.7%)」である。いじめられ経験としてはここでも「悪口」「無視・仲間はずれ」が相対的に多いようである。

Q3「学級担任のいじめへの対応の有無」

Table 3は、学級内でいじめを認知していた学生に、学級担任が解決のためにいじめ問題をクラスで取り上げたかどうかを、「たいてい」＝たいてい取り上げた、「～もある」＝取り上げたこともある、「ない」＝取り上げたことはない、「忘れた」の4つの選択肢で回答してもらった結果を各学校段階別にまとめたものである。小学校では何らかのかたちで73%以上が学級担任は対応したと回答しているが、中学校では56%と小学校に比べて多少対応が少ないようである。

Q4「学級担任の問題解決のための対処方法」(略)

Q5「『いじめ』発生の現状認識」

Table 4は、現在のいじめの発生状況をどのように教職課程履修学生が評価しているかを問い、回答をまとめたものである。現在のいじめの状況を多いと認識している学生は65% (男子学生) から70% (女子学生) 程度で、少ないと評価する学生は1～2%というものであった。これはアンケート調査そのものが「いじめ」を問題視しているおり、また、問題が報道されることも多い状況下での認識でもあるので、教職課程履修学生ゆえの認識とは単純にはいえないものではある。

Q6「『いじめ』の今後の推移についての評価」

Table 5は、いじめの発生状況が今後どうなっていくと思うかを教職課程履修学生に問い、その回答をまとめたものである。「増える」という評価をする学生は35% (男子学生) ～40% (女子学生) で、減ると楽観的にみている学生は6% (女子学生) ～10% (男子学生) にとどまる。「変化なし」と「増える」とを合わせると67% (男子学生) ～81% (女

子学生)となり、3分の2から5分の4という多くの学生がよい方向への変化を期待できないという評価をしている。

Q7『いじめ』問題報道への関心

Table 6は、いじめ問題に関する報道への関心をまとめたものである。さまざまな媒体でいじめ問題が報道された場合の関心の程度を、「極力得る」＝極力その記事を読んだり番組を視聴し情報を得るようにしている、「たまには」＝たまにはその記事を読んだり番組を視聴し情報を得ることがある、「向かない」＝ほとんどまたは全くそうした報道・情報には関心は向かない、の3選択肢への回答で測ったものである。積極的に報道等に関心を向け情報をえようとするものは20%弱という数字であった。ただし、全く関心を向けないという学生は4～5%という極めて少数であった。

Q8『いじめ』問題の報道・情報の受け止め方

Table 7は、いじめ問題の報道に接した場合のその受け止め方・対応について、「そのまま」＝報道・情報を受けたままにしている、「極力保存」＝報道・情報を極力保存している、「図書読む」＝教育雑誌や「いじめ」の図書など読むようにしている、「話し合う」＝友人や知人と「いじめ」問題について話し合ったことがある、「調べた」＝その他の方法で「いじめ」問題を調べたことがある、という5選択肢(複数選択を含む)の回答からまとめたものである。男女合計の結果で見ると「情報を受けたままにしている」割合が70%程度で、男女差に有意な傾向が認められ($\chi^2=3.4137$, $p=0.0647$)男子学生の方がその傾向が高いといえる(76%)。また、「友人などと話し合ったことがある」のは23%であったが、ここには有意な男女差が認められ($\chi^2=4.0741$, $p=0.0435$)、女子学生の方がよくこの問題を友人と話し合うようである(31%)。

Q9「いじめに対する教師の対応の正誤」

Table 8は、「いじめ問題」への教師の対応についてその正誤を問うたものの正答率を記したものである。違いが目立ったのは、問題1「弱いものをいじめることは人間として絶対に許されない、という強い認識に立つこと」および問題4「いじめられている子どもの立場に立った親身の指導を行なうことが必要である」で、これらを正しい対応としない学生がそれぞれ10%程度いた。いじめられ

ることやいじめられっ子についてさまざまな議論があり、どう考えるかに迷いがあるのかとも思われるが、ケース・バイ・ケースと考えると単純に正しいとは言い切れない記述ではある。ほとんどが正解であったのは、問題3「いじめはどの学校にもおこりうることで常に対応できるようにしておく必要がある」と問題5「生徒が教師に相談しやすい関係を築いておかななくてはならない」(正しい対応が正解)、問題2「いじめがあるのではないか」という意識を持っている子どもに悪い影響を与えるのでいじめについての問題意識は持たない方がよい」(誤った対応が正解)である。

Q1「中学・学級内『いじめ』認知」とQ5『いじめ』発生の現状」とのクロス集計およびQ6『いじめ』の今後の推移」とのクロス集計

Table 9-1およびTable 9-2は、中学時代の学級内での「いじめ」認知と現在の「いじめ」発生の状況認識との関連、および中学時代学級内「いじめ」認知と今後の「いじめ」推移評価との関連とを調べたものである。

Table 9-3およびTable 9-4は、中学時代のいじめ被害経験と現在の「いじめ」発生の状況認識との関連、および中学時代のいじめ被害経験と今後の「いじめ」推移評価との関連とを調べたものである。

Table 9-5およびTable 9-6は、中学時代のいじめ加害経験と現在の「いじめ」発生の状況認識との関連、および中学時代のいじめ加害経験と今後の「いじめ」推移評価との関連とを調べたものである。

Table 9-1からTable 9-6まで、それぞれ χ^2 検定結果と有意水準を表の下段に記したが、いずれも有意な関連は認められなかった。

Table 9-7およびTable 9-8は、小学～中学時代を通じてのいじめ被害経験と現在の「いじめ」発生の状況認識との関連、および小～中いじめ被害経験と今後の「いじめ」推移評価との関連とを調べたものである。それぞれ χ^2 検定結果と有意水準を表の下段に記したが、いずれも有意な関連は認められなかった。

Table 9-9およびTable 9-10は、小学～中学時代を通じてのいじめ加害経験と現在の「いじめ」発生の状況認識との関連、および小～中いじめ加害経験と今後の「いじめ」推移評価との関連とを調べたものである。それぞれ χ^2 検定結果と有意水準を表

Table 9 学級内いじめ認知等と現状認識・推移評価

9-1 学級内（中学）×「いじめ」発生の現状

学級：中	多 い	少ない	分らない	
あった	68.1	0.0	31.9	% (94人)
なかった	64.6	3.1	32.3	% (65人)
合 計	66.7	1.3	32.1	% (159人)

$$\chi^2=2.9635 \quad p=0.2270$$

9-2 学級内（中学）×今後の「いじめ」推移

学級：中	増える	変化なし	減 る	
あった	39.4	54.3	6.4	% (94人)
なかった	33.8	53.8	12.3	% (65人)
合 計	37.1	54.1	8.8	% (159人)

$$\chi^2=1.8482 \quad p=0.3969$$

9-3 被害経験（中学）×「いじめ」発生の現状

被害：中	多 い	少ない	分らない	
あった	66.7	0.0	33.3	% (15人)
なかった	66.7	1.4	31.9	% (144人)
合 計	66.7	1.3	32.1	% (159人)

$$\chi^2=0.1968 \quad p=0.9063$$

9-4 被害経験（中学）×今後の「いじめ」推移

被害：中	増える	変化なし	減 る	
あった	40.0	46.7	13.3	% (15人)
なかった	36.8	54.9	8.3	% (144人)
合 計	37.1	54.1	8.8	% (159人)

$$\chi^2=0.5917 \quad p=0.7439$$

9-5 加害経験（中学）×「いじめ」発生の現状

加害：中	多 い	少ない	分らない	
あった	83.3	0.0	16.7	% (18人)
なかった	64.5	1.4	34.0	% (141人)
合 計	66.7	1.3	32.1	% (159人)

$$\chi^2=2.6036 \quad p=0.2720$$

9-6 加害経験（中学）×今後の「いじめ」推移

加害：中	増える	変化なし	減 る	
あった	55.6	38.9	5.6	% (18人)
なかった	34.8	56.0	9.2	% (141人)
合 計	37.1	54.1	8.8	% (159人)

$$\chi^2=2.9721 \quad p=0.2263$$

9-7 被害経験×「いじめ」発生の現状

被害経験	多 い	少ない	分らない	
あった	63.6	0.0	36.4	% (33人)
なかった	67.5	1.9	36.8	% (126人)
合 計	66.7	1.3	32.1	% (159人)

$$\chi^2=0.8199 \quad p=0.6637$$

9-8 被害経験×今後の「いじめ」推移

被害経験	増える	変化なし	減 る	
あった	42.4	48.5	9.1	% (33人)
なかった	35.7	55.6	8.7	% (126人)
合 計	37.1	54.1	8.8	% (159人)

$$\chi^2=0.5629 \quad p=0.7547$$

9-9 加害経験×「いじめ」発生の現状

加害経験	多 い	少ない	分らない	
あった	71.7	0.0	28.3	% (53人)
なかった	64.2	1.9	34.0	% (106人)
合 計	66.7	1.3	32.1	% (159人)

$$\chi^2=1.6548 \quad p=0.4372$$

9-10 加害経験×今後の「いじめ」推移

加害経験	増える	変化なし	減 る	
あった	49.1	43.4	7.5	% (53人)
なかった	31.1	59.4	9.4	% (106人)
合 計	37.1	54.1	8.8	% (159人)

$$\chi^2=4.8824 \quad p=0.0871$$

の下段に記したが、「いじめ」発生の状況認識との関連は認められなかったが、今後の「いじめ」推移の評価との関連に有意な傾向が認められた。加害経験のある学生の方が加害経験のない学生より、今後いじめが増えると推定していることが窺える。

Table 10は、中学校学級担任の対応と現在の「いじめ」発生の状況認識との関連、および今後の「いじめ」推移評価との関連とを調べたものである。それぞれ χ^2 検定結果と有意水準を表の下段に記したが、中学校学級担任の対応と「いじめ」発生の状況認識および今後の推移評価との関連は認められなかった。

Table 11は、中学時代の学級内のいじめ認知、中学時代の被害経験、中学時代の加害経験、小学～中学を通じての被害経験および小学～中学を通じての加害経験それぞれと、「いじめ」報道・情報への関心度との関連を調べたものである。それぞれ χ^2 検定結果と有意水準を表の下段に記したが、「いじめ」報道・情報への関心度との関連は認められなかった。

Table 12は、小学～中学を通じての被害および加害経験者のいじめ情報を受けての対応を分析したものである。対応の5形態について、そうした対応をとると答えた学生（複数回答を含む）の割合を被害経験33人、加害経験53人を分母として算出した。全調査学生を対象としたものでは70%が「そのまま」（Table 7）で、Table 12のいじめ被害経験者、加害経験者の場合も同じであった。「話し合う」もほぼ同程度の数字であった。違うのは「図書読む」とした者の割合で、実数は被害経験者24人、加害経験者4人で、とりわけ被害経験者の70%以上が何らかの図書を読んでいる点である。それに比べ「話し合う」被害経験者は24%と少ない。「図書読む」「話し合う」両方の対応をした学生は1人だけであった。一方、加害経験者で「図書読む」は8%と少なく、「話し合う」が33%であった。なお、被害一加害経験による情報対応の違いについて χ^2 検定をしたところ、「図書読む」についてのみ被害経験者と加害経験者の選択率に有意な差が認められた（ $\chi^2=24.3663$ 、 $p<0.0001$ ）。

2.4 考 察

本調査が対象とした教職課程履修学生は1995年度入学で、多くが1983年小学校入学、1989年中学

校入学、1992年高校入学と考えられる。いじめが社会問題化した1980年代半ばが小学校中学年、1990年代半ばが高校3年から大学前半であった。小学校高学年から高校にかけては社会の目がいじめ問題にあまり向かない時期に当たる。こうした被調査者の学級内いじめ認知率は、それにしては小学校、中学校時代で高いものであった。いじめ被害経験は女子学生の小学校時代の多さを除けば1996年の『日本のいじめ』調査に比べて少なく、いじめ加害経験も同様であった。それでも小学校から中学校にわたる期間で何らかのいじめ被害経験を報告したものが30～40%、いじめ加害の場合が15～20%であり、過去を振り返ると結構いじめ被害にあい、いじめ加害をしたのである。高校時代は在籍校を反映してか、いじめ認知そのものから少ない。いじめの手段は、全体的には無視や言葉によるものが多く、女子と男子の違いが『日本のいじめ』調査同様、女子では間接的ないじめ行為としての無視やいやがらせ等が相対的に多く、暴力などの直接的身体的なものは特に中学生男子で相対的に多い。学級担任のいじめ問題があった場合の対応は、小学校の70%以上、中学校の60%弱で何らかの対応がとられてはいたという。その対応の方法については分析整理しなかったこともあり、学級担任が適切な対応をしたと学生たちが受け止めていたかどうかは分からない。

いじめの現状認識については、少ないと感じている学生はほとんどなく70%弱の学生が多いと感じている。また、今後の推移については減るとみる学生は10%弱にとどまり、増えるとみる学生は40%弱で、変化なしを加えると男子学生の70%、女子学生の80%になり、楽観視はしていない。これらのいじめ認識が過去のいじめ認知・体験とどのように関連しているかをみたのがクロス集計で、10%水準であるが統計的に有意な傾向を確認できたのは、小学～中学の加害経験と今後の推移評価との関連で、小学校から中学校までの間にいじめ加害経験をした学生はそうでない学生よりも今後いじめが増えると推測する傾向があるという。いじめ被害経験の方が悲観的な評価をさせると考えられたが、それ以上に加害状況を体験した場合、その解消の困難さを感じているのであろうか。両者とも教職課程履修学生としていじめ行為の減

Table 10 中学担任の対応と現状認識・推移評価

10-1 中学担任対応×「いじめ」発生時の現状

担任対応	多い	少ない	分らない	
あった	67.3	32.7	0.0	% (52人)
なかった	71.0	29.0	0.0	% (31人)
合 計	68.7	31.3	0.0	% (83人)

$\chi^2=0.1209$

$p=0.7280$

10-2 中学担任対応×今後の「いじめ」推移

担任対応	増える	変化なし	減 る	
あった	32.7	61.5	5.8	% (52人)
なかった	48.4	41.9	9.7	% (31人)
合 計	38.6	54.2	7.2	% (83人)

$\chi^2=3.0278$

$p=0.2201$

Table 11 報道への関心といじめ認知等との関連

11-1 学級内(中学)×「いじめ」報道への関心

学級：中	極 力	たまには	関心なし	
あった	18.1	79.8	2.1	% (94人)
なかった	16.9	75.4	7.7	% (65人)
合 計	17.6	78.0	4.4	% (159人)

$\chi^2=2.8278$

$p=0.2432$

11-2 被害経験(中学)×「いじめ」報道への関心

被害：中	極 力	たまには	関心なし	
あった	20.0	80.0	0.0	% (15人)
なかった	17.4	77.8	4.9	% (144人)
合 計	17.6	78.0	4.4	% (159人)

$\chi^2=0.7915$

$p=0.6732$

11-3 加害経験(中学)×「いじめ」報道への関心

加害：中	極 力	たまには	関心なし	
あった	11.1	88.9	0.0	% (18人)
なかった	18.4	76.6	5.0	% (141人)
合 計	17.6	78.0	4.4	% (159人)

$\chi^2=1.6898$

$p=0.4296$

11-4 被害経験×「いじめ」報道への関心

被害経験	極 力	たまには	関心なし	
あった	18.2	78.8	3.0	% (33人)
なかった	17.5	77.8	4.8	% (126人)
合 計	17.6	78.0	4.4	% (159人)

$\chi^2=0.1893$

$p=0.9097$

11-5 加害経験×「いじめ」報道への関心

加害経験	極 力	たまには	関心なし	
あった	17.0	77.4	5.7	% (53人)
なかった	17.9	78.3	3.8	% (106人)
合 計	17.6	78.0	4.4	% (159人)

$\chi^2=1.4028$

$p=0.4959$

11-6 中学担任対応×「いじめ」報道への関心

担任対応	極 力	たまには	関心なし	
あった	13.5	84.6	1.9	% (52人)
なかった	22.6	74.2	3.2	% (31人)
合 計	18.1	80.7	2.4	% (83人)

$\chi^2=1.3584$

$p=0.5070$

Table 12 被害・加害経験と報道情報への対応との関連

報道情報を受けての対応(被害学生33人、加害学生52人)

	そのまま	極力保存	図書読む	話し合う	調べた	
被害学生	72.7	3.0	72.7	24.2	9.1	%
加害学生	69.2	1.9	7.7	32.7	3.8	%
合 計	70.6	2.4	32.9	29.4	5.9	%

少を期待はしても、現実的な評価を下したのであろう。

次に、いじめ報道に対する関心やその情報への対応では、積極的な関心を向けている学生は20%弱、逆に全く関心がないという学生は5%程度である。また、情報は受けたままという学生が大半で(70%)、約4分の1弱の学生が友人と話し合ったことがあるという結果であった。これには男女差があり、女子学生の方が友人と話し合ったりすることが多かった(30%)。他の対応は5%以下にとどまっていた。このいじめ報道情報への対応については、小学校から中学校にかけていじめ被害を経験した学生と加害経験をした学生の2群に分け、過去のいじめ問題認知等とのクロス集計をしてみた。統計的に違いを確認できたのは、報道を受けて図書類を読むようにしている学生は被害経験者で多く(73%)、加害経験者では少ない(8%)という点である。また、話し合う学生は全学生対象の結果より多い数字で、被害経験者の24%と加害経験学生の33%という結果であったが、被害一加害経験による違いは認められなかった。このクロス集計からみえてきた被害経験と加害経験の違いは、『日本のいじめ』調査の小・中学生や本調査の当時の小・中学生と同じ考え方を教職課程履修学生が本調査時点でもとっていることを示唆する。それは、いじめ被害経験を自己を否定するものとしてとらえる傾向である。教職を志す学生として、かつ、被害経験をもったことから、いじめ問題に関心をもち図書類を読むのであるが、その経験を克服しているかによって友人たちと話し合うかどうかの違いがでると考えられる。他方、加害経験の場合、それが深刻なものでないケースが多いからか、率直にそうした経験も含め友人たちと話し合うことも多くなると考えられる。しかし、その認識はそこにとどまり、逆に図書類を読むというようには進まない点が問題である。なぜなら、いじ

めが今後増えると評価もしているのに、単なる個人的な経験的な理解にとどまる恐れがあるからである。

3. おわりに

学級内のいじめ認知や被害経験、加害経験が教職課程履修学生のいじめ認識や関心にどのような影響を与えているかを推測しようとしたのが本調査の結果分析であるが、女子学生の小学校時代の被害経験を除けば被害経験は少ないというのが教職課程履修学生の経験である。比較的弱者の立場に立つことは少なかったと想像される。あるいはリーダー的立場にあった学生の場合には、学級内のいじめをある程度客観的に認知し、それが認知率を高くしたともいえよう。また、加害経験の多さも、現実には他の児童生徒たちよりも多く加害行為をしていたというより、自らの過去の行動を客観的にとらえることができる現在の状況と過去の立場が経験率を予想以上に高くしたものといえよう。時に、いじめ被害体験は、子どもとその将来に長期に渡り深刻な、時に残酷な影響を与える。その上、前青年期以降の場合、いじめられ体験を人に語ることがきわめて少なくなる。被害経験学生はそこに働く自己否定的な感情を克服し、被害者であったことを恥じることなく語ることができるようになる必要がある。そうすれば教師集団の一員として、いじめられている児童生徒の心に敏感に対応するための潜在力となるからである。また、加害経験学生は、その背景要因も含めて加害動機の発生メカニズムを認識する必要がある。それは、いじめる児童生徒の教育課題を明確にし、働きかける糸口をつかむためである。いじめ問題をさまざまに経験した教職課程履修学生間でこれらを議論し、いじめ被害を具体的な人権問題として捉え、加害行為を教育問題とする観点をもてることが必要である。

引用文献・注

- [1] 島田啓二,「いじめ」の克服と教員養成,「生活指導研究」, 4, p.137, 1987年
- [2] 調査項目のうち Q1～Q4および Q7と Q8については前掲島田論文の質問項目を参考に字句上の改訂をして用いた。また、Q9は雑誌「教職課程」1996年8月号掲載のものである。ほぼ同じ調査が1995年・1996年に実施され、その結果は次の論文等にまとめられている。森住宜司, いじめ問題に関する新聞社説と教職課程履修学生の関心,「浦和論叢」, 第17号, p.391-410, 1997年
- [3] 森田洋司他編,『日本のいじめ—予防・対応に生かすデータ集』, 金子書房, 1999年

Abstract

The purpose of this paper is to examine the students' views on school bullying problem. The data of 52 female and 107 male students of a teaching profession course were analyzed and compared with the data of Morita et al.'s report (1999). Many (60-70%) students were aware of bullying in the class during elementary school days and some (25-45%) students were aware in junior-high school days. No relationship between the awareness of bullying behaviors and their interests in the news of bullying was found. There are some differences between the bullies and the victims. 70% of the bullied students who had victimized during their school days have referred to find out information by looking in books about bully/victim problems. 33% of the bullies (24% of the victims) during their school days have told about school bullying.

Key Words: school bullying, teaching profession course, student awareness, bully/victim experience, estimation of fluctuation